

棚田学会通信

第56号 目次

特集 棚田を支える技術(Ⅲ)	1
日本の棚田百選紹介	6
棚田学会新会長・新編集委員挨拶	7
事務局ニュース	8



特集 棚田を支える技術 (Ⅲ)



写真上:「市民親子参加の田植え体験」(提供:佐藤俊)
 左下:「収穫後の楮(こうぞ)」(提供:和田耕一)、右下:「お花見」(提供:小野忠)

伝統的な技術、新しい技術に焦点を当ててきた特集「棚田を支える技術」。
 今号では、棚田を守り、棚田の新たな価値の創造に取り組む3つの地域から寄稿を頂いた。ふるさとを、棚田を、支え続ける地域の思いを感じ取ってもらえると幸いです。
 (棚田学会編集委員会)

ブランド米「土佐天空の郷」の 振興による棚田保全

本山町役場まちづくり推進課 課長補佐 和田 耕一

【本山町の棚田と暮らし】

高知県長岡郡本山町は、四国の中央に位置し、北に石鎚山地、南に剣山地といった1000m級の高い山々に囲まれる盆地です。また、町の約90%は、山林で山々は豊富な水を蓄積し、各地から湧き出す清澄な水によって、幾多の谷川が形成されています。水田は、この谷川を水源として標高約250mから800mの間の急峻な土地に切り開かれ、等高線に沿った湾曲した棚田で形成されています。まさに日本の原風景とも言える光景は、見る人の心を和ませ魅了してやみません。



本山町の棚田の風景

しかし、この美しい棚田は、急峻である地理的条件から区画整備がされておらず、軽トラックがようやく通行できるほどの狭い農道に加え、水路さえも整備されていない条件の中で農業経営が行われています。生産者は、共同作業により水田環境を守り、谷川から水を引き入れるため数km先から水の道をつくり、機械の乗り入れが困難な水田は手作業で管理し、今日まで棚田を継承してきました。また、畦畔までも耕作地として利用し、ぜんまいなどの山菜や紙の原料となる楮（写真：表紙左下）を生産して収入源としてきました。さらに畦畔の雑草も土佐あかうしの飼料や有機肥料として使うなど無駄なく有効的に活用しています。このように棚田は、農村の暮らしの源であり、苦労の中にも生活の中に無くてはならない存在となっています。

しかし、これらの棚田を維持していくには、水田面積よりも広大な畦畔の草刈りや畔塗り作業、水管理など整備された平坦な水田に比べると非常に厳しい農業経営となります。さらに拍車をかけ

て、米価の低迷や肥料の高騰が重くのしかかり、お米を作れば赤字と言われる状況になっていました。このような魅力のない稲作農業では、後継者が育たず生産者の高齢化が進行していく一方でした。このままでは、棚田の耕作放棄地を増加させるばかりか、棚田と共に築かれてきた農山村の暮らしや文化など集落そのものも崩壊しかねない状況にありました。



棚田の田植え風景

【ブランド化の取り組み】

平成20年2月、この状況を不安に思う生産者が中心となって、生活の基盤である棚田を守り、魅力ある稲作農業の創造を目指す団体、本山町特産品ブランド化推進協議会（以後協議会）を設立し、お米のブランド化戦略を策定することとなります。しかし、高知のお米に対して、美味しいイメージは非常に低く、消費者に根付くブランドとなるには、どの様にすれば良いのか。大きな壁に突き当たることとなります。そこで協議会は、消費地の動向をよく知る米穀店に指導を仰ぎながら、ブランド力を高める付加価値を導き出していきます。

そのひとつが、日格差20℃以上にもなる四国山系がもたらす激しい寒暖差です。お米は日中、たくさん太陽の光を受けて光合成を行い、デンプンを作り出しています。光合成により葉に蓄積されたデンプンは、茎を通して籾に運ばれ蓄積されていきます。しかし、夜間に気温が高いと稲は体力の維持のため、このエネルギーとなるデンプンを使ってしまい、籾に蓄積される量が減ってしまいます。すなわち、寒暖差の大きい、この地域のお米はエネルギーの消費量が少なく沢山のデンプンを蓄積していることとなります。ある研究機関で調べたところ、この地域のお米はデンプンの網目が発達し、霜降りのように見えることから霜降り米として美味しさを表現してきました。

また、お米は、カリウムに対して、マグネシウムの含有量が高いほど美味しいとされています。その成分を多く含むにがり栽培期間中に水田に散布することで旨みと甘みの豊かなお米を生み出すことに成功。さらに、大粒の厳選や良食味・高品質などを追求した出荷基準を設定するなど美味しさの理由と良食味と高品質を分かり安く消費者に伝える仕組みを構築しました。こうして生み出されたのが、ブランド米「土佐天空の郷」です。



ブランド米「土佐天空の郷」の生産者

【ブランドの振興による棚田保全】

このお米は、21年産米から販売を開始。平成22年11月に開催された「お米日本一コンテスト in しずおか」では、西日本で初めて、最高峰の最優秀賞を受賞、日本一美味しいお米として沢山のメディアに取り上げられてきました。この話題が転機となり、大きく知名度を高め、農家所得の向上も実現しています。さらに、平成28年にも同大会において、2度目の食味日本一を受賞したことでブランド米として、また、美味しいお米の産地として、不動の知名度を確立させています。

協議会の活動は、今年で10年目を迎えています。地域で協働し本気でブランド化の取り組みを実践してきたことで棚田への関心が高まり、荒廃の速度は確実に緩やかになっています。また、生産者の高齢化問題では、依然、高齢化率は高いものの、後継者となる若手生産者が増え始める嬉しい話題も聞かれるようになってきました。今後も魅力のある稲作農業の確立に向けた活動を立ち止まることなく進めることで棚田保全に繋がっていきます。

「ここには、未来に残したい、いなかがある」の合言葉で！！

棚田、農村の「新たな価値」

柱本田園自然環境保全会事務局長 佐藤 俊

眼の前に広がる棚田の景観。その見渡せる場所に足を踏み入れると、誰しも不思議な感情が全身を貫く。それは、衝撃と言っても良いかもしれない。本来的に人が持っているDNAが呼び覚まされるのではないかと思えるほど、あらゆる人が驚嘆する。緩やかな曲線だけで描かれたふちどり。細かく区分けされた水面。直線や真円を持たない不確かな曲線の持つ自由さが、人の心に、なごみと安らぎを与えるのかも知れない。

しかし、棚田は、どれほど狭いものであっても、たいした計測器の無かった時代、完全な水平をつくるために土を削り、山土を運び、突き固め、石積みを実施した先人の苦勞と相互扶助の意識はいかほどであったろう。村に、子どもが一人誕生したら、村人が総出で、一枚の田を切り拓いたといわれる。そこに織り成された人々の情感やぬくもりや絆も、先人の苦勞とともに、この景観から、言葉なしで伝わってくるようだ。「生きる」ということのために壮大なドラマと大事業がここでなされてきた。棚田の景観は、その痕跡でもある。

俳人、村上鬼城は『生きかわり 死にかわりして 打つ田かな』と詠んでいる。先祖代々受け継いできた田畑を守り、耕し続け、受け渡してきた人々の、「いのち」に対する覚悟にも似た太い共感が表白されている。生まれ変わり「死に」代わりながら『いのち』を受け継ぎ、次世代に渡していく。そこでは「命」はもはや自分のものであって自分のものではない。先祖代々打ち続けてきた田畑はもはや単に個人の所有物などではないという存在感覚がここにある。「里山」に生まれて「里山」に死ぬ。これ以外に生きるすべを用意しないという先人の覚悟。先人の気構えに胸を打たれる。

何段にも重なり合い、海のうねりのように築き上げられてきた石積みのある「棚田風景」。これこそ何世代にもわたり人々が団結してきた証しであり、それこそが「日本の原風景」である。この素晴らしい「風景」をぜひ未来に残したい。

当地、和歌山県橋本市柱本区には「芋谷」と呼称される谷筋に百数十枚の棚田が広がっている。県が主催するワークショップを数度経て、村人たちの思いは、「耕作放棄地をなくし、景観を保全し、多くの市民に感動を与えたい」との願いに集約された。

また、平成24年には、地元と市民グループが共同して「柱本田園自然環境保全会」を結成し、市民参加のイベントを企画。また平成27年には当地が「和歌山県棚田段々畑サミット」の会場となった。人を迎えるために、村の人たちは暑さをいとわず毎日のように雑木を切り払い、雑草を刈り、農道を整備し、竹林を伐採した。この、村の営みは従前もそうであったように、今年の夏も同様に続けられている。



当地の棚田風景
(和歌山県「美しい棚田」H27認定)

また、棚田は「緑のダム」といわれ、下流の洪水防止に大きな役割を持っている。それだけではなく、気温を安定化させ、空気を湿潤化し、なによりも人々の心に癒しを与える。里山の自然の持つ価値は、現代社会にあっていっそう重要性が増しているのかもしれない。

ここ橋本市は和歌山県の最北に位置するが、紀見峠を境に大阪南部の都市群と接続している。ここでは十数年前から農村と都市住民が連携して田植えを体験したり（写真：表紙上）、秋の収穫祭、里山ウォーキング、棚田でのヨガイベントなどを企画し、毎年多くの市民が訪れる。中心部を流れる小川では、子供たちが水遊びし、サワガニや小魚を追いかける姿が、どこか懐かしく、心和ませる。



棚田風景の中でのヨガ体験

米作りを体験することで、食の教育にもなる。里山

の生きものたちとの触れ合いが心の優しさを育成し、知的な好奇心を高めることになる。棒切れを拾って、土と草の上を走り回り、野の草花を摘んだ経験が、豊かな人間性を育成することにつながるかも知れない。

私たちは、現代の子どもたちや若い親たちを対象に、農作業体験を企画し、自然の中で育つことを目的に「はしもと里山学校」を運営している。12月の寒風吹きすさぶ中で「もちつき大会」も行う。泥んこになって田んぼを走り回る「どろんこオリンピック」も開催している。村人の指導を受け「しめ縄作り」も体験する。田植え、草取り、収穫、生き物観察会、など年間数十回、のべ3000の親子が参加している。農が営まれ、自然が守られていてこそ、子供たちは学校の「教室」では体験できない素晴らしい「宝物」を得ることができる。

古来受け継がれてきた棚田地帯は、今や、都市空間で行き詰る現代人の癒しの場所であるとともに、子どもたちの豊かな人間性を育てる絶好の舞台でもある。自然と共に生きてきた農村の「新たな価値」がここにあり、さらに思いを込めて発信して行きたい。

「ふるさとを錦で飾り隊」の取り組みについて

山梨県南アルプス市中野区「ふるさとを錦で飾り隊」

隊長 小野 忠

1. 隊の設立

「もう歳だから田園は休むさ。」「お父さんが腰を悪くしたんで、来年から誰か田園やってくれんかなあ。」

農業者の高齢化と担い手不足により、15haあった中野の棚田はこうして一枚ずつ休耕し、徐々に耕作放棄が進み始めました。

私達は、自分達の地域が次第に元気を失っていく様を目の当たりにし、「何とか活力を生み出せないだろうか。」と強く思いました。平成27年6月、同じ思いを抱いた退職者世代を中心に「ふるさとを錦で飾り隊」を結成し、「休耕田対策」を始めることにしました。

「とにかくやってみるじゃんか、みんなで！」を合言葉に。

2. 実践「花を咲かす」と「ペンキ塗り」

中野の棚田は、バックに甲府盆地や霊峰富士を眺望でき、田舎らしさがふんだんに詰まった、ここにしかない魅力を秘めています。この農村風景を磨き、その素晴らしさをまず地元の人に気づいてもらおう、そう考えました。



春5月の棚田



秋9月の棚田

そして実践の第一歩に「休耕田花でおめかし作戦」と「ガードレールお色直しプロジェクト」を選びました。

まずは、隊員が休耕田の耕作を可能な限り引き受けます。どうしても耕作者の見つからない田園は隊で引き受けて耕し、花の種を蒔きました。春には菜の花やポピー、秋にはコスモスや赤そばの花が咲き、草茫茫だった田園を花でおめかししました（写真：表紙右下）。周囲から浮いていた白いガードレールも、次々と景観色にお色直ししました。



赤そば咲く棚田

3. 介護予防活動とコラボ

一昨年から、おめかし作戦に介護予防を目的に活動しているグループが加わりました。75歳以上の後期高齢者と呼ばれる人たちです。

一枚の休耕田を預かり、種を蒔いて管理し、春にはポピー、秋にはコスモスの花を咲かせます。花が咲けば皆で花見としゃれ込み、花後は種採りに汗を流します。

高齢になっても、田畑を居場所にして花づくりに励み、地域課題の解消に一役買いながら、皆健康で3年目の秋を迎えました。

4. そして、今

こうして、中野の棚田から休耕田が減ってきました。今では周辺に真っ白なガードレールは見当たりません。伸び放題にされていた棚田の畦畔は、いつしかこまめに刈られるようになりました。地域外から多くの人々が癒しを求めて訪れるようになりました。



ガードレールお色直し

「中野には何もない!」「つまらないへき地!」と思っていた地元民が、先祖伝来の芸術的作品ともいえる棚田風景を楽しむようになりました。

5. 未来に託す

私達は、隊の活動が若い人に引き継がれ、中野の棚田が永く美しくいつまでも残っていくことを願っています。

しかし、棚田ではそれなりの収入を得にくいことなどから、中心を担う後継者の育成は難しくなっています。

こうした現実を乗り越え未来に引き継ぐためにも、“棚田の価値を一層高めたい”と草刈りに精を出す日々です。

日本の棚田百選紹介

福岡県東峰村「竹地区の棚田」

～整然と美しい棚田は先人の知恵と努力の結晶～

東峰村農林観光課 和田 勲

宝珠山地区は、標高 130m～400m にわたり棚田が形成され、その中に集落が存在する典型的な中山間地域です。棚田は中世に入って開発が始まったと考えられます。そばには彦山神領を管理した役職を意味する地名(仙頭)も残っており荘園領主であった彦山の管理の元で開発が進められたものと思われまます。数百年もの昔、一畝ずつ大地を耕し、石を積み上げ、土を運んで造成された宝珠山地区の棚田は、先人の英知や労力の結晶です。感謝の一念で、今日まで営々と守り続けて来ました。棚田は現在、すべて石垣で補強してあり、最も古いものは室町時代のものだという説があります。



竹地区の棚田風景

竹地区の棚田は比高差 160m の急傾斜、面積 11ha の中に約 400 枚もの棚田と 21 戸の集落があります。この地区の棚田は、形状・連続性・保存状態などがいずれも際立っていることから、平成 11 年に農林水産省認定の「日本の棚田 100 選」の栄誉を受け、後に「竹地区の棚田及び岩屋神社などの山岳信仰遺跡群」が「美しい日本の歴史的風土 100 選/準 100 選」にも選定されました。現在、この棚田を保全するため竹地区住民が棚田保全委員会を組織し、棚田を利用した農業体験や祭り等のイベントを行い、体験交流や PR 活動を通して棚田の持つ役割を学んでもらう活動に取り組んでいます。宝珠山地区の棚田は、寒暖の差が厳しく、清らかな水

が流れ込む宝珠山の棚田米は、適度な粘りがあって美味しいと評判です。田植えの頃は、暗くなると蛍の幻想的な光を楽しむこともできます。

通常、棚田は狭隘な谷間のわずかな空間を利用し自然石を積み重ねて田に利用しているため、列車等などでは行きにくい場所にあるのが一般的ですが、東峰村の竹地区棚田は JR 筑前岩屋駅から徒歩 15 分と気軽に行くことができます。季節の移り変わりに合わせて変化する棚田を何度も見に来れると旅行者にも人気です。列車等の車窓から眺める棚田絶景です。(現在、平成 29 年九州北部豪雨により JR 不通のため代行バスが運行中です。)

稲刈りの頃は、あぜ道沿いに自生する彼岸花が満開になります。黄金色の稲穂と真っ赤な彼岸花のコントラストが大変美しく目で秋の訪れを感じられます。

東峰村は、平成 29 年 7 月 5 日に福岡県から大分県にかけて観測史上最も多い記録的な雨量を観測し、8 時間に約 743mm の降水量を記録する大豪雨となりました。この災害で人的被害に加え土石流による甚大な被害を受けましたが、竹地区の棚田は、水源かん養、洪水の防止、土壌の浸食や崩壊の防止になどの多面的機能によって、大きな被害もなく住民の生命と財産、暮らしを守ったのではないかと思います。このような、先人から引き継いだ棚田を今後も守り続けます。



竹地区の棚田のライトアップ

棚田学会新会長挨拶

会長就任にあたって

東京大学新領域創成科学研究科教授 山路 永司

このたび第7期（第5代）の会長を仰せつかりました。石井進先生、木村尚三郎先生、中島峰広先生、千賀裕太郎先生と、錚々たる先輩方と比べて、力不足は自認しています。よろしくご指導ください。

1年ちょっと前に、棚田学会誌の巻頭言執筆のご依頼がありました。「巻頭言は、もっと大物が書くものだ」と固辞しましたが、押し切られました。そこで、私としては、その頃考えていたことを1,200字にまとめてみました。

表題を、『多様な棚田学』をめざして」としました。棚田学は本来多様な学なのに、その多様性を実現しているのか、という問いを發したつもりです。しかし、その実現のための方法を提示することはできませんでした。残念ながら、いまも暗中模索状態です。

日本学術会議の「学会名鑑」によると、わが国には、2,025の学協会が登録されています。その多くは、伝統的科学、方法論を元にした細分化された科学です。大学の学部・学科も、経済学部経営学科、地理学科、西洋史学科、土木工学科、電子工学科、等々、伝統的科学はすべて、専門性を定義しそれを深めてきました。その成果は素晴らしく、私たちは、先端科学の恩恵を受けて安全で快適な生活を送り、過去の膨大な学識の蓄積のおかげで豊かな精神世界を築き上げることができました。しかし同時に学問の細分化は、時に、木を見て森を見ず、疾病を見て全身を見ず、という批判も浴びることになりました。そうした批判に対抗して、学の総合化、学融合、inter-disciplinary、trans-disciplinary といった概念が登場してきました。

私が最初に学会設立に立ち会った「農村計画学会」はその一例です。「豊かで美しい農村環境と、活力と魅力にあふれた農村社会の創出をめざす」という課題に対して、農業土木学、建築学、都市計画学、農業経済学、農村社会学、緑地学、植物学、昆虫学、水質学、等々の専門家が集まって、国全体の計画や個別具体の計画づくりを研究し提言をしてきました。そして新たな「農村計画学」づくりを目指しました。言い換えれば、個別科学の適用から始まるのではなく、目的設定に応じた科学の持ち寄りです。

棚田学も同じ性格を有していると考えます。棚田を守るにはどうすれば良いのか、棚田地域を発展させる

ためにはどうすれば良いのか、この熱い思いを持った人々が集まってできたのが棚田学会ではないでしょうか。こうした思いから、「多様な棚田学を」と書きました。

加えて、棚田学会は、いわゆる学のためだけの学会ではありません。棚田を守るための「活動組織」としての役割も有しています。学会会則第2条には、「本会は、棚田に関する研究、会員相互の意見交換、連絡を図ることによって、棚田の保全に向けた活動を推進することを目的とする。」と書かれています。実際、文化庁の幹部、劇団を通じての啓蒙活動を行う方々、文筆業の方等も理事会メンバーとして会務を執行していました。いわゆる学者先生も、その専門分野は多様であり、私自身、これまであまりおつきあいのなかった方々とのお話は、新鮮で刺激的でした。大会・シンポジウムで取りあげるトピック、若手研究会や談話会（現在は発表会に改組）での話題提供も棚田学の多様性を示していました。

しかし、すべての学会・学術団体が直面している会員数の減少、会員の高齢化は、棚田学会においても顕著です。先般のシンポジウムで発せられた「農業者はいないのですか」という問いかけは、厳しい、しかし本質的なご意見でした。同様に「若者が少ない」「女性がまだまだ少ない」というご指摘もありました。

棚田学の発展、棚田学会の発展、棚田保全施策の向上、農村空間の発展、会員のみなさんごの発展、これらを目指して、みなさんとともに棚田学会として頑張っていきたいと思えます。どうぞよろしくお願いいたします。



棚田学会新編集委員挨拶

信州大学学術研究院・農学系助教 内川 義行

先の役員改選により、新たに編集委員会委員として参画することとなりました。都内から遠方で、かつ不慣れなこともあり、十分な働きができますか、い

ささか不安もありますが、創造的な学会誌編集ができますように、微力ながら尽くす所存です。学会誌は学会の“顔”だと思います。棚田を取り巻く時代の今を広く捉え、多くの特に若い学生を含む会員や社会一般に対し、魅力的であらねばならないと感じます。そうした紙面づくりに、少しでも貢献できればと思います。棚田学会ならではの視点で、社会に対する発信ができるよう、取り組んでゆければと思いますので、どうぞ今後ともよろしくお願い申し上げます。

滋賀県立大学教授 水野 章二

棚田学会設立以来の会員ですが、積極的に関わってきたというわけではなく、時々現地見学会に参加したり、時には原稿を書いたりする、やや中途半端な位置にいました。日本中世史を専門とする歴史研究者ですが、棚田学会で活動する歴史学関係者は、初代会長石井進氏をはじめ、中世史家が多い。それは中世という時代に限られた文献史料しかなく、地域社会の実態を考えるためには、現地調査などが不可欠という状況にあるからです。棚田とそれを生み出したムラを見ることは、地域の歴史を体感することといってもよいでしょう。近畿在住の編集担当として、多様な棚田の過去と現在をつなぐ役割を果せばと願っています。

京都産業大学教授 出田 和久

棚田は生産性の点では条件不利地域であるが、景観の良さを魅力に大都市住民との交流を軸に維持が図られ成功している事例は多い。しかし、その大部分は交通アクセスの良好な地域に所在し、多くの棚田は高齢化の波に飲み込まれようとしている。近年は、国土保全の観点から維持を図る必要性が認識されるようになったとはいえ、具体的な成果には乏しいといわざるを得ない。

このような中で大都市から遠く隔たった地での「大地の芸術祭」は積極性があり興味深く頼もしい。とはいえ、棚田は都市からのアクセシビリティのみならず、傾斜や規模など実に多様である。こうした多様性の中でどのように棚田を活かしていけるのか関心を持ってみたい。

日 時：2018年12月15日(土) 13:00～17:00
会 場：立正大学品川キャンパス 9号館 943教室

それに際し、以下の要領で発表者を公募します。

募 集 数：5題(口頭発表)

発 表 者：原則として棚田学会会員。但し高校生、大学生、大学院生は会員以外も応募できます。

発表内容：学術研究、調査事例、活動事例、政策・行政紹介等、棚田および棚田が立地する農山村空間に関するものなら分野や内容を問いません。

発表時間：25分+Q&A 5分

応募締切：11月3日(土)

応募・お問い合わせ：

棚田学会研究委員会 発表会担当

k-yasui@qf7.so-net.ne.jp 090-1405-3555

◎新理事紹介

(任期：2018年7月21日～2021年総会日)

会 長 山路永司

副 会 長 高木徳郎、花野耕一、安井一臣

理 事 出田和久、上野裕治(新任)、内川義行(新任)、遠藤牧人、岡島賢治、大澤啓志、神田竜也(新任)、栗田英治(新任)、齊藤裕嗣、高橋久代、竹田和夫、中里良一、馬場範雪(新任)、松澤徹、水野章二(新任)、向笠功一(新任)、山岡和純、山本早苗

監 事 木村和弘(新任)、水谷正一(新任)

◎棚田学会誌 20号(2019年夏発行予定)への投稿

募集中! 締め切りは2019年1月10日です。

論文、事例研究、報告等、奮って執筆して投稿してください。

【編集後記】

前々号からの3号分の担当編集が何とか無事に終わり、ほっとしております。

ご協力を頂きました皆様、どうも有り難うございました。今後のより良い通信紙面に向けて、会員の皆様からのアイデア等を頂けると嬉しいです。

(栗田英治)

事務局ニュース

◎棚田学会 2018年発表会発表者募集

棚田学会では、以下の日程で発表会を開催いたします。

棚田学会通信 第56号 2018年10月19日発行
発行/棚田学会

〒169-8050 東京都新宿区西早稲田 1-6-1

早稲田大学教育・総合科学学術院 高木徳郎研究室内

TEL: 03-5286-1572 FAX: 042-385-1180

E-mail: tanadagakkai@gmail.com